

18世紀の「写真」ファンタジー

Giphantie 国物語 (1760年)

中 崎 昌 雄

はじめに

1. Tiphaigne de la Roche (1729-1774) とその時代
2. Tiphaigne の著作
3. 「Giphantie」物語 (第1巻)
4. 「Giphantie」物語 (第2巻)
5. 写真のファンタジー「嵐の海」「画廊」(翻訳)
6. Tiphaigne は「写真」を予言したのか？

はじめに

たいていの写真史の本はその序章で Tiphaigne de la Roche 「Giphantie」(1760) を取り上げている⁽¹⁾。この物語の第1巻第18章「嵐の海」(La Tempête) で写真の原型とも言うべき幻想的アイデアが展開されているからである。Tiphaigne (1729-1774) は18世紀フランスの医者、文筆家であるが、現在ではその方面ではほとんど知られていない。ただ彼の数ある著作の中でこの「Giphantie」だけが、次ぎの年1761年にイギリスで「Giphantia」として訳され出版されているところを見ると、この本だけは当時ヨーロッパでかなりの評判になったのであろう。

しかし当時はいざ知らず、現代から眺めると彼はとても同時代フランスの Voltaire (1694-1778), Rousseau (1712-1778) などと肩を並べられるような思想家でもないし文筆家でもない。現在ほとんど忘れられたような存在であって当然である。

それが内容に写真に関係するところがあると言うので、近世フランス研究家 Edouard Fournier (1819-1880) によって再発見されることになった⁽²⁾。1846年のことである。Daguerre が銀板写真を完成し、功成り名を

遂げてパリ東郊 Bry の自宅で死亡したのが 64 歳、1851 年 7 月 10 日であるから Daguerre 存命中の出来事である。Fournier の発表は Daguerre 銀板写真公開 1839 年 8 月 19 日からそう時間が経っていない。

彼はこれを始め「La Mosaique de l'Ouest」誌 1846-1847 年号に発表した。あとでまとめて発明史研究「Le Vieux-Neuf (古くて新しい)」(2 冊本、1859) の中にも書いた⁽³⁾。写真史でこれを取り上げたのは Mayer-Pierson 「La Photographie」(1862)⁽⁴⁾ が最初であろう。

「Giphantie」物語は長く忘れられていたうえに、写真のアイデアと言っても単なる「ファンタジー」に過ぎないから、これが後世の Thomas Wedgwood (1802)⁽⁵⁾ や Nicéphore Niépce (1816)⁽⁶⁾ の科学的写真研究にヒントを与えたとは思えない。またその証拠も発見されていない。こんな事もあって従来の写真史の本では高だか第 1 巻 18 章「嵐の海」の一部分だけを引用するのが精一杯であった。

ただ私はつねづね、この「Giphantie」と言う物語の全体はどんな筋でどう展開し、何を語っているのかについて素朴な疑問を抱いていた。幸いなことに、たまたま「Giphantie」Babylon 版 (1760) のマイクロフィッシュ版⁽⁷⁾ が大阪大学文学部文学科フランス文学教室に所蔵されていることを知り、同教室の御好意でこれを借用することができた。

1. Tiphaigne de la Roche (1729-1774) とその時代

Tiphaigne de la Roche (Charles-François) は 1729 年フランス Montebourg に生まれた⁽⁸⁾。ここは「シェルブールの雨傘」で知られることになったノルマンディ半島の港町 Cherbourg から東南 30km にある小さな町である。Tiphaigne は医者志望でやはりノルマンディ地方の Caen 大学で医学を学んだ。パリに住んだこともあったらしいが、生地 Montebourg で開業し 1774 年この地で死亡した。

彼の生涯はルイ 15 世 (1710-1774) の在位 1715-1774 年に重なる。これはロココ (Rococo) 時代と呼ばれた。ルイ 15 世は太陽王ルイ 14 世 (1638-1715) の曾孫である。もともと凡庸な君主であったが、派手好きで浪費癖のあった太陽王の植民地拡張政策、財政破綻の結末を引き継ぐ損な役割を演じることになった。太陽王の晩年にはスペイン継承戦争 (1701-

1714) があって、フランスはイギリスに植民地を奪われただけでなく、莫大な国費を戦争に費してしまった。それでも太陽王の時代フランスはヨーロッパ文化の華であった。しかし次ぎのルイ 15 世の時代になると新興国の追い上げがきびしくなる。

Friedrich 大王（1712-1780）のプロシア， Maria Theresia（1717-1780）のオーストリア，それに新しく西欧世界に参入して来た Ekaterina 2 世（1729-1796）のロシアなどである。太陽王のとき未曾有の文運を誇ったフランスも，ルイ 15 世の時代になると列強との間の駆け引きに遅れをとり，翳りが目立ってきた。なにより煩いのは海峡をへだてたイギリスである。この国は清教徒革命（1640-1660）でゴタゴタしたものの，名誉革命（1688-1689）後は政情も落ち着いて，次第にヨーロッパの工場としての地位を固めた。そしてその力は植民地の拡大，市場の開発などに着実に発揮され始めた。イギリスの蚕食のまえにフランスは後退するばかりである。ヨーロッパは揺れ動いて止まない。

ポーランド継承戦争（1733-1735）があったかと思えば，それに踵を接するようにしてオーストリア継承戦争（1740-1748）がある。その上にプロシアを中に挟んでイギリス，オーストリア，ロシアまで加わった 7 年戦争（1756-1763）が始まる。7 年戦争の結末はパリ条約でついたが，この結果フランスは北アメリカとインドで足場を失うことになった。

こんな中であってフランス国王ルイ 15 世は国政，外交を大臣と寵姫 Pompadour 夫人 (Marquise de) (1721-1764) に任せて，自分は狩猟と遊楽に日を送った。これでは仕方ない。宮廷は華麗，繊細なロココ調に飾られたが，財政が破局的な様相を呈し始めて当然である。

Pompadour 夫人はルイ 15 世を慰めて言ったという「洪水のおこるのは，われわれの後のことですよ。」

この予言は的中した。孫のルイ 16 世（1754-1793）の時代になると腐敗と破綻を重ねてきた旧制度 (Ancien Régime) が崩壊することとなった。フランス大革命（1789）である。ルイ 15 世時代に開花した啓蒙思想がこの革命の原動力として作用した。これには Tiphaigne も少しは力を借している。啓蒙運動の先兵として活躍したのは Voltaire である。彼は 3 年間のイギリス滞在中（1726-1729）に Newton（1642-1727）の力学を

学び「人間悟性論」(Locke, 1632-1704)の主張する立憲制, 三権分立主義に共感した。イギリス滞在中に Voltaire が老 Newton を訪問したエピソードは有名である⁽⁹⁾。病身ということで会えなかったが Newton の葬儀には参列した。Tiphaigne が生まれたのはこの2年後である。多くのフランス文化人は名誉革命後にイギリスで確立した立憲制を理想とし, ブルボン朝の専制絶対主義に反感を抱いていた。たとえば Montesquieu (1689-1755)「法の精神 (De l'esprit des lois)」(1748), Rousseau「社会契約論 (Contract sociale)」(1762)などがそれである。

これらにも増してフランスのみならず全ヨーロッパ思想界全体に影響を与え, 18世紀啓蒙主義の全盛期を飾ったのは「百科全書 (Encyclopédie)」(1751-1772)の刊行であろう。この全書はその副題「科学と工芸の理論的事典 (Dictionnaire raisonné des sciences, des art et des métiers)」から分かるように, 精神科学を重視した従来の事典と違って自然科学, 技術, 工業に重点をおいた。計画は Diderot (1713-1784), 数学者 d' Alembert (1717-1783) が立てたが, 第2巻ですぐに発行禁止の処分を受けた。しかし Diderot は非合法出版を続けて21年後の1772年に本文17巻, 図版11巻を完成させた。「理性の時代 (un âge du raison)」の幕開けである。この言葉はそのままの形で「Giphantie」第1巻11章の中に出ている。

このころイギリスでは Hume (1711-1776), Adam Smith (1723-1790) がそれぞれ新しい道を模索し, 大陸では Kant (1724-1804) が来たるべき活躍への準備に余念がなかった。彼の星雲説が発表されたのは「Giphantie」発刊の5年前, 1755年のことである。

物理学の世界では Newton「プリンキピア (Principia)」(ラテン語版, 1687年)の発表によって遥かな天体の運行まで記述できる力学的宇宙観が構築できた。しかし物質の本質とその変化の理解には, この壮麗な理論といえどもまだ無力である。これは Newton「光学 (Opticks)」の英語版第2版(1717)の後尾に付いている31疑問 (Queries) を読むとよく分かる⁽¹⁰⁾。Newton は56歳(1699)で造幣局長官になったが, このときから1727年, 84歳で死ぬまでの約30年間錬金術の研究にその精力を傾けていた⁽¹¹⁾。手で触れ目で見ることのできない世界の理解はいつの世でも難しい。

日常に目にする化学反応の中でもっとも目覚ましいのは燃焼であろう。燃焼で木材は灰に変わるが、その間に煙は出るし光も出る。そして熱が発生する。太古から人類はこの化学反応をいろんな方面に利用して来た。人類を「火を使う動物」と定義してもよいほどである。1723年、Tiphaigneが生まれたころプロシア王待医 Stahl（1660-1734）は古い Becher の説（1669）を拡張して「フロジストン説」を唱えた。Newton の死ぬ 4 年前である。この仮説は多くの化学現象をかなり巧みに統一的に解釈できた。

しかし物質の変化を取りあつかう化学の世界でも、真の理解への突破口は物理学のときと同じように定量的観察によって始めて可能となった。天秤を使って化学変化の後と先との重量の増減を追うのである。その代表的業績が Tiphaigne と同時代の Joseph Black（1728-1799）の「固定気」（炭酸ガス）の研究である。Black が当時の学芸の中心地パリやロンドンを離れたスコットランドで仕事をしたのは面白い。このころ、手の汚れる化学の実験など都会でははやらなかったのである。Black はまた物質に固有の比熱とか、物質の相変化に伴う潜熱の研究もした。同じスコットランド人 James Watt（1736-1819）はその蒸気機関改良（1765）の仕事のとき Black から水-水蒸気相変化について多くのデータを提供してもらった。効率の良い彼の蒸気機関の完成を契機として、産業革命は急速にそのモメンタムを加える。

イギリス社会は全ヨーロッパに先駆けて近代資本主義社会に変貌していく。経験主義的なイギリス人の独壇場である。しかし新しい元素観の確立と言うような明晰な洞察力を必要とする分野ではフランス人が活躍する。それを成し遂げた Lavoisier（1743-1794）は「Giphantie」のころまだ 17 歳である。新しい化学の金字塔である彼の「化学要論（Traité élémentaire de chimie）」が出版されるまでにはこれから 30 年ほど待たねばならない⁽¹²⁾。この「化学革命」の本はフランス革命勃発の 1789 年に出版された。

Tiphaigne の生まれた 1729 年は日本では 8 代将軍 吉宗の享保 14 年である。そして彼が死亡したのは 10 代将軍 家治の治世、安永 3 年である。この安永 3 年 8 月、杉田玄白らの「解体新書」が刊行されている。だから Tiphaigne の活躍したのは日本で言えば田沼時代と言ってよい。吉

宗の統制的政策のタガがはずれてインフレになったとは言うものの、このころ世界最大の都市であった江戸にはいかにも、江戸らしい文化の華がその大ぶりの花卉を開きはじめた。その先兵の中に平賀源内(1728-1779)がいる。Tiphaigneと源内は不思議なほどその生まれた年と没年が重なっている。源内は本草学に詳しく宝歴12年(1762)閏4月、湯島天神前の京屋で開催した大規模な物産会で名を挙げた。このあと火浣布(石綿, 1764), タルモメイトル(温度計, 1768), エレキテル(1776)と立て続けに江戸市民を驚かした。錦絵の鈴木春信とは神田白壁町の同じ町内に住んでいた関係で、春信に技術的な指導をしたと言われている。また文芸の世界で源内は大田南畝と親しく、多くの諷刺的な戯作を物にした。同じような空想世界への旅物語という点で「Giphantie」と比較できるのは「風流志道軒伝」(宝歴13年, 1763)であろうか⁽¹³⁾。これは大人国, 小人嶋, 長脚国, 穿胸国などへの旅物語である。風来山人 平賀源内はこれら戯作の中で猥雑なまでにヤケクソで、野性味に富んだ野次馬的批判精神を發揮した。私の見るところこの野性味は「Giphantie」にはないようである。やはり「理性の時代」の産物なのであろう。

2. Tiphaigne の著作

Tiphaigne の作品には「奇妙なアイデア」(idées bizarres) の物が多いと言われる。例えば彼が25歳のときの「暴かれた愛 (l'Amour dévoile)」(1751) がある。

1. 「暴かれた愛 (l'Amour dévoile)」副題「交感学説 (le Système des sympathie)」(1751)

副題から分かるように人間の他人に対する好悪の原因に関する説である。彼の考えによるとこれを支配するのは汗の中に含まれる物質だと言う。現在の内分泌, ホルモンの考えのはしりと言えよう。

2. 「四肢欠損または人間の種子 (Amélie ou la Graine d'hommes)」(1754)

国家, 制度その他に対する諷刺と批判。

3. 「哲学雑纂 (Bigarrures philosophiques)」(1759)

哲学的随想, 再版あり。

4. 「Giphantie」（1760）

空想上の国での見聞記の形をとった政治、制度、道徳などへの諷刺。
1761年英語訳刊行。

5. 「フランス西海岸における経済史（Essai sur l'histoire économique des mers occidentales de France）」（1760）

Tiphaigneの住んでいたフランス西海岸を中心とした貿易に関する
労作で引用されることが多い。

6. 「l'Empire des zaziris sur les humains ou la Zaziriocratie」（1761）

7. 「Sanfreinまたは私の田園生活（Sanfrein ou mon dernier séjour à la campagne）」（1765）

8. 「農業、植物、鉱物についての考察（Observations physiques sur l'agriculture, les plantes, les minéraux）」（1765）

9. 「風見鶏またはSanfrein（Girouette ou Sanfrein）」（1770）

10. 「イブラヒムの言葉（Discours d'Ibrahim）」（1779）

2冊本でこの中に次の各編を含む。「イブラヒムの意見（Visions d'Ibrahim）」
「冥土への旅（le Voyage aux limbes）」「靈魂についての考察（l'Essai sur la nature l'âme）」「Giphantie」

11. 「フルティエール事典（Dictionnaire de Furetière）」

「町人物語（Roman bourgeois）」の著者 Antoine Furetière（1619-1688）に関する事典の増補改版に協力した。

3. 「Giphantie」物語（第1巻）

「Giphantie」物語は第1巻（176ページ）と第2巻（174ページ）に分かれている。各章の表題とその英訳を「表1」に示す。私が参考にした英訳本は大英図書館の御好意でそのマイクロフィルムを手に入れる事ができたものである。この本の発行所は次ぎのようになっている。

「Dublin, G. Faulkner, Essex Street; J. Potts, Dame Street, 1761」⁽¹⁴⁾

翻訳者の名前は書いてないが献辞によると「Miss Ross」からの懇請で翻訳したとある。この「Dublin版」とは別に「London版」（1761）と言う

表1 「Giphantie」物語の章名比較

TABLE DES CHAPITRES		TABLE OF CHAPTERS	
PREMIERE PARTIES		PART 1	
1. Préface	1	INTRODUCTION	1
2. l'Ouragan	4	1. The Hurricane	3
3. Belle-vue	11	2. The Fine Prospect	7
4. La Voix	16	3. The Voice	10
5. Les Contre-sens	21	4. The Reverse	13
6. Les Apparitions	32	5. The Apparitions	19
7. Les Surfaces	37	6. The Surfaces	22
8. Le Globe	46	7. The Globe	27
9. Les Propos	51	8. The Discourses	30
10. Le Bonheur	62	9. Happiness	36
11. Le Pot-pourri	70	10. The Hodge-Podge	40
12. Le Miroir	78	11. The Mirrour	44
13. l'Épreuve	87	12. The Trial	49
14. Les Talents	101	13. The Talents	56
15. Le Goût du siècle	109	14. The Taste of the Age	61
16. La Raisonneuse	113	15. The Female Reasoner	63
17. Les Crocodiles	118	16. The Crocodiles	66
18. La Tempête	128	17. The Storm	72
19. La Galerie, ou la fortune du genre humain	137	18. The Gallery	77
20. l'autre côté del la Galerie	158	19. The other Side of the Gallery	90
SECONDE PARTIE		PART 2	
1. Le Repas	1	1. The Repast	1
2. Les Pepins	16	2. The Kernels	9
3. Le vieil Amour	21	3. Antiente Love	12
4. Les Greffes	29	4. The Grafts	16
5. La Volupté	38	5. Voluptas or Pleasure	21
6. Jeunesse perpétuelle	44	6. Perpetual Youth	24
7. Les Démangeaisons	53	7. The Itchings	29
8. Les Compensations	67	8. The Compensations	36
9. Nil admirari	72	9. Nil Admirari	39
10. l'Arbre fantastique	80	10. The Fantastical Tree	43
11. Les Prédications	89	11. The Predictions	47
12. Le Système	101	12. The System	53
13. Épitire aux Européens	126	13. Epistle to the Europeans	65
14. Les Maximes	141	14. The Maxims	72
15. Les Thermomètres	147	15. The Thermometers	75
16. Les Lentilles	155	16. The Lentils	79
17. Chemin sous terre	164	17. The Subterraneous Road	83
FIN		FINIS	

のもあるらしい。写真史家 Gernsheim⁽¹⁵⁾ や Newhall が参考にしたのはこの「London 版」である。たとえば Newhall 「Photography: Essays & Images」(1980)⁽¹⁶⁾ の中には「嵐の海」の全編と、その次ぎの「画廊」の1部が再録されているが、その刊本は「London: Printed for Robert Horsfield, 1761」となっている。しかも「嵐の海」(The Storm) は第10章で93ページだと言う。ところが「表1」に見るように「Dublin 本」で「嵐の海」は第17章、72ページである。どうしてこう章分けが違っているのか分からないが、単に Newhall の本の誤植かも知れない。ただし私の調べた限り Newhall の本に再録されている英訳の文章は「Dublin 本」のそれと全く同じであった。また「表1」のフランス語原題とその英訳を比較すると気が付くように、第1巻に限ってであるが両方で章分けが異っている。これはフランス語原本第1章「Préface」を英訳では「Introduction」として別の章にしなかったからである。このため第1巻フランス語原本全20章が英訳で全19章となっている。

こればかりではない。英訳では本の題も「Giphantia」と変えてある。国の名前だからと言うので「Estonia」「Latvia」などに倣ってこうしたのであろう。ただフランス語原題「Giphantie」は著者 Tiphaigne の綴字を入れ換えて作ったアナグラム(anagram)であるから、本当は「Giphantia」では面白くないのである。英訳には「London 本」にも「Dublin 本」にも同じ長い副題がついている。

「A view of what has passed, what is now passing, and during the present century, what will pass, in the world」

もちろんこの中の「現世紀」は18世紀である。「Giphantie」物語の中には未来記のような個所もあるからこんな副題にしたのであろう。フランス語原本に副題は全く付いていない。

次ぎにこの「Giphantie」物語の概要を第1巻から始めて眺めてみよう。もともと「Giphantie」は空想の国での見聞記の形を取っているが、物語その物は平凡で面白くない。冒険的であった大航海時代はすでに過去の物となり、18世紀のこの時代ともなると航海はかなり安全になっている。大洋への航海はこのころ貿易のための実用期に入ったと言えよう。船の建造術、海図、航海術などが飛躍的に進歩したからである。

Defoe 「ロビンソン・クルーソー物語」(1719), Swift 「ガリバー旅行記」(1726)などは Tiphaigne の生まれるすぐ前に刊行された。いずれも Newton 晩年のことである。しかし, これら旅行記と「Giphantie」との似たところを強いて探せば僅かに第1巻第2章「強風」のところ位である。地下の洞穴を通過して故郷の海岸に辿り着く第2巻第17章「地下道-帰還」の方がむしろ後世の Jules Verne 「Voyage au centre de la terre」(1864) に似ていると言えよう。もちろん Tiphaigne よりはるかに想像力にも創作力にも富んだ Verne のことだから, 100年も前のこんな忘れられた物語に想を得たとは思えない。

第1巻

1章「序文」(Préface) 私は全世界を自分の家と思い, 全人類を兄弟と考えて世界の国ぐにを訪ね, 古代の遺跡の前にたたずんだ。そして文明国の愚かさ, 野蛮な国の知恵, 富める国, 悪徳の栄えた国などを見た。これらの国ぐにの偏見, 政治, 制度, 習慣, 宗教, 法律などを書き止めておいたのだが, ある日すべてを火に投じてしまった。空しくなったのである。ただ1冊だけ残った。これが, ここに発表する「Giphantie」である。

2章「強風」(l'Ouragan) ギニア砂漠を北に向かって出発した。未知の土地へ行きたいと言う止め難い欲望のためである。2日間は何事もなかった。3日目から周りが背の低い灌木ばかりとなり, そのうちに岩の多い砂漠に来た。風が吹きはじめ, やがてこれが強風が変わって自分は空中に捲き上げられた。死ぬのかと思ったがその内に風は収まり静かな夜が来た。私は疲れて寝てしまった。自分は知らなかったが, 本当はこの国の精霊の加護で無事だったのである。

3章「良き予感」(Belle-vue) 目が醒めるとまだあたりは暗かったが次第に東が明るくなって来た。高い岩山の上に登ると東の方に豊かな平野が見えた。進むにつれて草木は大きくなった。まわりの植物, とかげ, 昆虫, 鳥は今まで見たこともない変わった種類で, エレガントであり多くの種類があった。空気は冷たくて甘い香りがただよって来た。

4章「声」(La Voix) やがて声がした「止まれ, 目を上げてよく見よ。守護してやった者の姿を見よ。」数歩のところの空中に影のような姿が見えた。人間の形をしていてその姿は平安と喜びを与えた。「私はこの島の総

督（*préfet*）である。」総督は言う「砂嵐の海の中のこの小島の名前は『*Giphantie*』だ。お前が学問好きの人間のようなだから保護してやったのだ。この国の珍しい物を見物させてから故郷に帰えしてやろう。この国はエデンの園が人間に与えられるよりも前に精霊たち（*esprits élémentaires*）に与えられたのだ。精霊たちはここで平和に暮らしている。ここで英気を養ってから地上に帰って、お前たちの便宜をはかってやるのだ。」

ここで、この「精霊」について説明しておこう。1761年、英訳者はこれを「*elementary spirits*」と訳した。ところが *Gernsheim*⁽¹⁵⁾ はこれを「*elementary [sic] (elemental) spirits*」としている。「*elemental*」（元素の）の方が良いと言うのであろう。1761年、英訳者はフランス語をそのまま英語に置き換えて「*elementary spirits*」とした。ところが、これでは「初歩的な精霊」と取られかねない。それで「*elemental*」の方が良いと判断したのであろう。フランス語「*esprits élémentaires*」は「四大を支配する精霊たち」のことである。「四大」はアリストテレス四元素説の「土、水、空気、火」4元素（*éléments*）である。これが天地を構成し、その働きが自然現象である。あとで分かるように「*Giphantie*」国はこれら精霊の住む国で、彼等はここで休息し、浄化される。英気を養って力をつけてから、集まって地上での活躍の相談をするのである。

5章. 「思い違い」 (*Les Contre-sens*) この国だけがまだ生命の活力を保存している。ここで新しい種を作って地上に届けるのである。自然科学者は新しい種を発見したと言うが、実はわれわれが届けたのである。素晴らしい薬効の薬もあるのだが、このごろは人間に贈ってはいない。それは人間が墮落したからである。いままで動物や植物については優れた種を作ったが人間では失敗した。「現在のバビロンの状態を見よ。」*Tiphaigne* はそれとは言っていないが、人はここで始めて「*Giphantie*」が批判の書であることを知るのである。都市「バビロン」(*Babylone*) はパリやベルサイユのことで、そこに住む「バビロン市民」(*Babylonien*) たちはパリ市民やルイ15世を取りまく宮廷人たちである。*Tiphaigne* はこのあと7ページにわたって18世紀フランス旧制度の腐敗と欠陥、道徳の退廃について嘆く。

6章. 「おばけ」 (*Les Apparitions*) 四大の精霊たちは人界で汚染されて目に見えるようになる。これが神話や伝説の神である。いろんな神が作ら

れる「ジュピター、ネプチューン、プルート、アポロン」人界から帰って来た四大の精霊たちは「Giphantie」国で自分を純化しなければならない。

7章. 「外見え」 (Les Surfaces) 森を出て丘に来た。その麓に太い柱が立っている。100 ピエ (1 ピエ = 33cm) の高さで、その上から人間の形をした蒸気 (vapeurs) のような物が立ち昇っている。この柱は四大の精霊の精製装置 (filière) である。装置の中には純化された精霊たちが残る。「外見え」が付着して、それで判断されるのは人間世界でも同じである。このあと Tiphaigne はまたバビロン市民について、その「外見え」(surfaces) だけの謙遜、廉直、友情、信仰、愛国心などについて批判する。

8章. 「地球儀」 (Le Globe) 丘の上に自分が立つと全世界が見える。浄められた四大の精霊たちは自分が求められている地上の地点に向って飛ぶ。例の太い柱の下からこの丘に向って100段ほどの石段がある。これを半分ほど登ったところでガヤガヤ声がある。丘の上に大きな地球儀があって、例の騒音はここからしていた。地上からここまで目に見えないパイプが引いてあって、全世界からの声都在这里で聞けるのである。「この杖の端をそこに当てて、他の端を耳につけよ。」

9章. 「おしゃべり」 (Les Propos) バビロン市のところに杖を当てると次ぎのような声が聞えた。最近の国家に対する不平不満。杖を少し下げると別の声が聞える。税への不平、バビロンにおける言葉の乱れ。またどこからか女の声も聞こえる。小説好きの女らしい (j'aime ce roman à la folie)。この小説についていろいろ批判をする。

10章. 「幸福について」 (Le Bonheur) たまたま杖の当たったところが会合の席らしく、幸福に関する数人の意見が聞けた。「金がない方が良い。いやある方が良い。幸福の源は愛であり無欲である。いやそうではない。」

11章. 「ごちゃごちゃ」 (Le Pot-pourri) 杖をあちこちに動かすといろいろな意見が聞ける。税金、火山、逢引きする男女のささやき、兵士の叫び声。かと思うと新しいストッキングの売り込み (ここで英訳者⁽¹⁷⁾は奇妙な誤りを犯す。「肺炎に」かからない「ni de fluxions」のところで「defluxions」という英語を創作している)、さらに「理性の時代」(un âge du raison)⁽¹⁸⁾ など。たいていの願いには、その反対がある「東風が吹けばよいのに。いや西風があると港へ帰えれる。」「子供が欲しい。いや不孝者の道楽息子は

流行病で死ねばよい。」「夫が欲しい。いや別かれない。」

12章「鏡」 (Le Miroir) 地上のいろんな声を聞いていると総督が1つの鏡を手渡した。これで地上の現在と過去の全てを見ることができる。四大の精霊たちが地上の大気の中に反射するところを作って、全てがそこから反射され鏡の中に入ってくるようにしてある。鏡をいろいろ傾けると好きな所が見える。私は15分間で全世界を眺めることができた。こうしてこの「鏡」と例の「地球儀」のお陰で、居ながらにして全世界のことが分かる。とにかく全世界が病んでいる。どの国も悪い。これは全て人間性が欠除してきたからである。

13章「試練」 (l'Épreuve) バビロン市を見ようと思って鏡を北に傾けた。家の庭に人が集まって宴会をしている。バルコニーに若い娘が坐っている。今日はこの娘「Sophie」の結婚式である。総督はこの娘の物語をする。彼女に5人の男が求婚した。軍人、学者、実業家などである。彼女は5年の間に自分を喜ばす仕事をした人と結婚すると約束する。この5人の中に怠け者がいた。この男は野心がなく、たまに娘を訪ねるのを唯一の楽しみとしている。約束の年が来て娘が結婚相手に決めたのはこの男である。他の男たちはなるほど立派な業績を挙げた。だがこれらは自分自身に対する満足でしたことでもある。怠け者だけが純粹に娘を求めた。娘はそれに心を打たれたのである。

14章「才能について」 (Les Talents) バビロン市を眺めると1人の男が草の上で何か書いていた。それは次ぎのような物語であった。ジュピターがあるとき、それぞれの都市に才能を与えようと約束した。そこでバビロン市の守護神は前の日にジュピターの所へ出掛けてお世辞を言って彼を喜ばせておいた。このためかジュピターはバビロン市にだけは「汝の欲する物全てを与えよう」と言ってくれた。欲ばりの守護神はすべての才能を挙げて、その望む全てが与えられた。混乱はこれから生じた。「全てがあるが、何もない。」

15章「世紀の傾向」 (Le Goût de siècle) この物書きの男から数歩のところまで2人の男が歩きながら議論をしているのが鏡で見えた。「世紀の傾向」についてのその会話は次ぎのようである。「世紀」と言うは言うまでもなく18世紀である。「われわれはギリシャ、ローマに学び200年前までは

まだ幼年期だった。100年前に根を張り、やっと今世紀になって現代の物を持つことができた。しかし後世の人は言うだろう。『17世紀は完成に努めた。18世紀はバビロン市民が好きなように仕上げた絵だ。すぐに忘れられてしまうだろう。』

16章「新しい女」 (La Raisonneuse) 2人の女が話をしている。1人は伯爵夫人らしい。相手は他人の眼を憚って小さな声で自分の意見をいう。新しい女らしく「屈理屈屋」(la raisonneuse)である。あまり良く聞こえないが次ぎのように言っているらしい「ねえ伯爵夫人、他人に分からないようにしさえしたら、何をしてもよろしいですよ。」

17章「ワニ」 (Les Crocodiles) 私はかつてペルシャに行ったことがある。当時そこでは国を2分する論争があった。その結果がどうなったかを知るために鏡をその方に傾けてみた。相変らず回教徒がコーランの解釈をめぐって2派に分かれて争っている。両軍が対陣してまさに戦争が始まろうとするとき、1人の老人が進み出て「ワニ」を回っての戦争の物語りを始めた。かつてナイルの両岸に2つの町があって、人を食う「ワニ」を保護するか殺すかについて争い、戦争の結果2つの町は滅びてしまった。だから、こんな無駄な戦争は止めるべきである。しかし老人の言葉は無視されて、ペルシャの回教徒同志の戦争が始まった。私は狂気の殺戮の結果は見る気がしなかった。総督はまだ他に見せる物があるから先へ進もうと誘った。この第17章「ワニ」は18世紀「Giphantie」(1760)ころにヨーロッパによくあった無駄な王位継承戦争などへの諷刺である。

18章「嵐の海」 (La Tempête) 「おしゃべり地球儀」から数歩のところには地下道があって、ここに入ると部屋があった。アフリカのド真中だと言うのに、この部屋の窓から嵐の海が見えた。驚く私に総督が絵だと教えてくれた。精霊たちが発明したある粘り塗料をキャンバスに塗り、これを写したいと思う対象物に向けると、その姿がキャンバスに固定化 (fixes) されるのである。この第18章「嵐の海」については、あとでその全訳を紹介し、詳しく説明する。

19章「画廊または人類の運命」 (La Gallerie, ou la fortune du genre humain) 「嵐の海」の部屋のとなりは長い画廊になっていた。両側には200もの窓があって、そこからは「Giphantie」国の風景が眺められる。窓

と窓の間には例の絵が架かっている。それは太古からの人類の物語である。総督は言う「さあ目を挙げて見るのだ。大地を揺り動かし、人類の運命を決定したこれらの驚嘆すべき出来事を見るのだ。」

歩むにつれてアッシリア、バビロニア、ペルシャ、ギリシャなどの興亡が展開する。アレキサンドル大王の征服、ローマ帝国の興隆、カエサルの征服と続く。外を見よ。「Giphantie」の田園は平和その物ではないか。それなのに地上では争いばかりである。地上には平和がふさわしいのに。

20章. 「画廊の続き」 (l'Autre côté de la Galerie) 絵を前にしての総督の説明は次第に熱をおびてくる。諸国民の興亡は続く。ローマの衰退、アッチェラの劫掠、マホメットの台頭、シャルマーニュ大王の統一。そして現代へとつながる。全てが抗争の種である。「Giphantie」(1760)の刊行の時代は北アメリカの支配をめぐるフランスとイギリスの争いは絶え間がない。「アメリカなど発見されなかった方が良かったのだ」などと言う今から見ると妙な意見が開陳されているのはそのためである。「全ての国ぐに、とくにヨーロッパの諸国は水銀の塊に似ている。ほんの少し揺すっただけで、それは分かれまた分かれる。そして、やがてまた何干という仕方ですべて結合しなおす。絶えず離合集散を繰り返す。」「だれかこれを治める人間はいないのか。」

第2次世界大戦後の世界、とくに最近の東ヨーロッパ、ソビエト連邦における激動を目にしたわれわれは、ヨーロッパはいまだに200年も前の「Giphantie」に書かれたのと同じだと言う感慨にとらわれる。

4. 「Giphantie」物語（第2巻）

1章. 「食事」 (Le Repas) この国の空気の中には活力粒子 (corpuscules actifs) が含まれているから何も食べなくても疲れることがない。しかし、この国の食事を味うのもよいだろう。総督が案内してくれたのは洞穴で、大理石テーブルの真中にメロンのような果物が1個おいてあって、そのまわりに色の違った塩を入れた30個ほどの塩入れがおいてある。総督が勧めるので、果物を少し口にして水を飲んでみたが、全く味がなかった。総督が塩をかけて食べろと言うので、そのとおりにした。塩入れにはラベルが貼ってある。「ヒラメ」塩入れの塩を果物にかけて食べたところ最上の

「ヒラメ」の味がした。総督の説明によると、これらの塩はそれぞれの食品からその「味の素」(parcelles primitives)を抽出した物だそうである。バビロン市民に教えてやってもよいのだが、またそれにも税金がかけられそうだから止めにする。

2章. 「種子」(Les Pepins) 食事が済んだら木陰の道をとおって、その突きあたりの林へ行こうと総督が言う。途中で総督はその林について次ぎのように説明した。アダムはリンゴを食べたためにエデンの園を追われたが、そのとき四大の精霊の1人がリンゴの食べ残しから3個の種子を採っておいた。それを「Giphantie」に持ち帰り植えてできたのがこれから行く林である。

3章. 「最初の愛の樹」(Le vieil Amour) 林へやって来た。「運命のリンゴ」(pomme fatal)の1番目の種子から成長したのが、この「愛の樹」(l'arbre d'amour)である。紫色の花弁の中に白い斑点がある。この木から出る精気のために地上に愛がもたらされたのだ。全ての喜びのもとであり、争いはなくなり、人間は満足しておたがいに結びついた。

4章. 「接ぎ木」(Les Graffes) しかしこの愛の樹も次第に「イバラ」や「イラクサ」に侵されて花はしぼみ、根はつかなくなった。それで新しい芽を摘みとって、これを他の木に接ぎ木した。しかし親木からの樹液によって成長した愛の樹は変質して、元どおりの木ではなくなってしまった。愛に情熱などが伴うことになった。これは愛の本来の姿ではなくて「愛の幻」(phantôme)である。野心、富への愛などが生まれた。純粹の愛はどこへいったのだ。このあと Tiphaigne はバビロンにはびこっている社会悪の数かずを指弾する。

5章. 「悦楽」(La Volupté) しかし汚れたとはいえ愛が地上にまだ保存されているのは喜ばしい。ほんとうは始めに真の「悦楽」なる物があったのだが、それが芸術によって洗練されて活力を失ってしまったのである。

6章. 「永遠の若さ」(Jeunesse perpétuelle) バビロンでは全てが放縦に流れ50歳の老人と25歳の若者が同じような行動をしている。「若い老人」(jeunes viellard)が生まれた。中には反省する老人もある「もう若いときのような愚行は止めよう。金でも貯めて甥にやろうか。」若い老人は言う「くよくよするな。さあ遊びに行こう。」

7章. 「いらだち」 (Les Demangeaisons) それから、また南に向かって歩くと岬に出た。そこにまた木立があった。今度のは「運命のリンゴ」の木の第2の種子から生えた樹である。この樹は葉、花、果実をつけない。細い繊維が生えていて、それに「うじ虫」(vermisseaux) がついている。これが虫になって人を刺す。刺された人に「いらだち」が発生する。話したい、書きたい、知りたい、目立ちたいなどである。

8章. 「いらだちの功罪」 (Les Compensations) 私は言った「これでは困る。」総督は反論する「良い面もあるのだ。これで人間は仕事をするようになるのだ。」この「いらだち」に駆られて天文学者は新しい衛星 (satellite) を発見するかも知れない。William Herschel (1738-1822) が自作の反射望遠鏡で天王星を発見するのは「Giphantie」から20年も後の1781年になってからである⁽¹⁹⁾。

9章. 「無感動」 (Nil admirari) 私は富や名誉に無関心であるから、この虫には刺されたくない。総督は言う「平静であるためには無感動であるのが一番である。」

10章. 「発想の樹」 (l'Arbre fantastique) 小川のそばを歩いて行くと広い牧場に来た。花がカーペットのように咲いている。1本の樹がある。これには薄く細かい葉がギッシリと付いている。「運命のリンゴ」の木の第3番目の種子から生じた樹である。これを「発想の樹」と名付ける。それは芸術、発明、科学などの発想、アイデアがこの葉の上に書いてあるからである。ふつうの樹なら1本の樹の中でどの葉も同じはずだが、この樹では同じ葉が1枚もない。葉の上に繊維で図形やら文字が書かれている。葉が成長すると小さく巻かれて風で地上に運ばれる。そして人は「発想」を得るのである。

11章. 「予言」 (Les Prédications) 私はとくに学問の枝の葉を調べて、そこに書いてあるところを読んだから次ぎのような予言ができる。このあと Tiphaigne は歴史学、形而上学、道徳、詩、哲学などの枝の葉に書いてあった内容を告げる。残念ながらどれも抽象的内容ばかりで予言とはとても言えない。しかし最後に皮肉めいた捨て台詞を言っている「どの意見にも必ず反対意見がある。だから論争は絶えない。」

12章. 「哲学体系」 (Le Système) このあと「実存」(l'existence des

êtres) などと言うものが一体あるのかなどと哲学上の議論が展開されている。この時代の大問題である。Kantが「純粹理性批判」(Kritik der reinen Vernunft)を發表して「物それ自体」(Ding an sich)などと言いつ出すのは、これから20年も先の1781年、彼が57歳のときである。Tiphaigneの最後の言葉は悲観的である「全ては崩壊しつつある。もう破滅はそこまで来ている。」この章の中に「顕微鏡的動物」(animaux microscopiques)などにも知能があるのだろうか言う議論が展開されている。オランダのLeeuwenhoek(1632-1723)⁽²⁰⁾がバクテリアなどを発見したのは、Newton「プリンキピア」(1687)より前の1682年のことであるから、Tiphaigneのころには微生物の存在などはもう常識になっていたのである。

13章 「ヨーロッパ人への手紙」(Épître aux Européens)「発想の樹」の葉に書いてあった別の予言をヨーロッパ人への手紙の形でまとめる。この手紙はMontesquieu「ペルシャ人の手紙(Lettres persanes)」(1721)を真似たのであろう。この作品の中でMontesquieuはヨーロッパを旅行した2人のペルシャ人の故郷への手紙の形を借りて、ヨーロッパ文明とくにフランス旧制度への批判を展開していた。このあとTiphaigneは商業、貿易の発達を辿り、その結果として各国が市場と植民地を争っている現状を嘆く。面白いのはヨーロッパが輸入する物の中に「ニッポンからの磁器」(porcelaine au Japon)が挙げられていることである⁽²¹⁾。長崎の出島をとって輸出されたのであろう。ただし英訳では「Japon」はなく、単に品物は「china」と訳されている⁽²²⁾。

14章 「処世訓」(Les Maximes)これから世に出ようとする18世紀バビロンの若者に向けての処世訓6則である。「発想の樹」に書き誌してあった物と言うことにしてある。Tiphaigneがこれまでの経験から身につけた処世術であろう。バカバカしい内容であるが、フランス革命前夜の世相を知るのに少しは役立つかも知れないと思えるので次ぎに紹介する。

1. 小さな才能でもよいから、これを活用すると出世ができる。たとえば、ちょっと詩を作ってお世辞に添えるとよい。
2. 小さな誤ちをすると出世が遅れる。たとえば人前での「くしゃみ」である。

3. いつでも「公共のために」を口にしろ。心に思っていなくてもそう言え。
4. 褒められたいと思うより、他人を褒める方にまわれ。
5. 地位に選り好みをするな。なんにでも喜んでつけ。
6. 「献辞のようにお世辞を言え」「序文のようにハッターリをかませ」「科学や芸術の本のように冗舌であれ」「生かじりの哲学者のように熱中しろ」「歴史家のように嘘をつけ」「文士のように向見ずであれ」

15章. 「温度計」 (Les Thermomètres) これから Tiphaigne は自分自身のアイデアを開陳する。「発想の樹」の葉を調べているとき、小さな葉の1枚が自分の額の中に入ったらしい。私はまず動物油に似たある精油 (quintessence) を作り、これを温度計のアルコール (esprit-de-vin) の代わりに入れた。温度計は物理学、詩、衣服、刀剣、僧職、軍事などあらゆる才能に応じて作る。テストされる人間が温度計の球に触れると、その人の才能に応じて液柱が上がり下がりする。これを国王に贈れば適材適所に人を配置することができるだろう。少女はこれを利用して自分に合った夫を選ぶことができる。私のこの発明はやがて生活必需品となるだろう。

16章. 「レンズ」 (Les Lentilles) 「発想の樹」も時には花や実をつける。哲学の枝の花は臭気が強く、よほど強い頭脳でなければ耐えられない。果実は丸くて小房に分かれる。小房の中の種子は透明で水晶のようである。それは非常に小さくてレンズ (lentilles, 豆) の形をしている。実が熟すると弾じて風に乗って地上に届いて人間の眼に付着する。するとその人は「物がそのままに見える」ようになる。永遠の眼から見るとすべては「無」である。こういう人が「覚者」 (gagne) と呼ばれる。

17章. 「地下道-帰還」 (Chemin sour terre)⁽³⁰⁾ 「発想の樹」へ行くときに辿った小川は何千と集って大河となり洞穴の中に流れる。総督に従って中に入る。総督は次ぎのように言って姿を消してしまった。「驚いてはいけない。これからが最後の光景である。」地下の水道を水の流れのままに進む。地球の中心である。水は激流となって岸にぶっかる。その内に全くの暗黒となってしまった。やがて微かな光が見えて来た。これが近づくにつれて次第に明るさを増し、やがてすさまじい火山の噴火となった。溶けた岩石は水に落ちて、ひどい衝撃を発生する。これが地上の地震である。こ

こを過ぎるとまた暗黒の水路となる。総督らの四大の精霊が見守ってくれているから自分はこんな危険の中にあっても無事なのである。Tiphaigneは暗黒の中で反省をする。「夜のあとには昼があり、春のあとには秋がくる。全ては交替する。これが自然の姿なのだ。だからバビロンはその全ての欠陥にもかかわらず世界第1の都市なのだ。」

長い地下の旅路の果てに、遙か遠く光が見えて来てとうとう地下道を抜け出すことができた。空気は柔くやがて太陽が昇って来た。地上の全てが優しい妻のように自分を抱擁してくれた。気が付くと私の故郷の海岸である。バビロンから西北600スタディオン(108km)のここから、私はこの苦難に満ちた旅の物語をバビロンに送らせてもらおう。

5. 写真のファンタジー「嵐の海」「画廊」(翻訳)

問題の写真ファンタジー第1巻第18章「嵐の海」全章と第19章「画廊」の前半の翻訳を次ぎに掲げる。

18章「嵐」(La Tempête)

喧しい地球儀から数歩のところ、地面が洞穴になっていて、40から50段の芝の階段があり、その底は踏み固めた地下道になっていました。われわれは中に入り、総督の案内に従って暗い角を何度も曲がってから、やっと明るい所に出ました。彼は中位の大きさの、ほとんど飾りのない部屋に案内しましたが、そこで見た物は私を驚かせました。窓をとおして海が見えました。それは2から3スタジオン(1 stade = 180m)も離れているように見えました。大気は雲に蔽われ、嵐を告げる弱よわしい光しか通していません。荒れ狂う海は小山のように水を巻き上げ、海岸は渚に砕ける波の泡で白く彩られていました。

私は叫びました。ほんのさっきまで晴れていたのに、一体どんな奇跡で急に曇ったりするのか。また、どんな奇跡でアフリカのだ真ん中で大洋が見えるのだ。こう言いながら私はこんなに在りそうもない事実を、目で確かめようと急いで走り寄りました。ところが窓から頭を突き出そうとしたところ、壁のように跳ねかえす障壁にぶつかったのです。

この衝撃と同時に、こんな訳の分からない事柄に驚いて、私は5、6歩う

しろに退きました。

総督は言うのです。急ぐと誤るぞ。あの窓、あの広い水平線、あの暗い雲、そしてあの荒れ狂う海など全ては絵画でしかないのだ。

1つの驚きから別の驚きです。私はまた急いで近づきましたが、私の目はまた騙され、手で触れても1枚の絵がこんなにまで幻想を与えようとは、とても信じられませんでした。

総督は続けます。精霊たち (les esprits élémentaires) は器用な科学者たちよりずっと絵が下手だから、その方法で評価してもらわねばならない。君も知っているように、光線 (rayons de lumière) はいろいろな物体から反射されて、その物体の形を全ての磨かれた表面の上に描く。たとえば、目の網膜、水の上、鏡の上などだ。精霊たちはこの逃げていく像を固定 (fixer) しようとして研究したのだ。彼らは非常に敏感 (subtile) で非常に粘り、すぐに乾いて硬化する物質を合成したのだ。これでもって絵は瞬きする間に出来てしまう。彼らはこれをキャンバス (toile) に塗り付け、描こうとする対象に向ける。このキャンバスの最初の反応は鏡と同じだ。この上に近くの物も遠くの物も、光線が運ぶ全てが写って見える。しかし鏡には出来ないのだが、このキャンバスのあの粘り塗料のお陰で、像が保持できるのだ。鏡は忠実に物を写すが、それを保持できない。われわれのキャンバスは、これらを忠実に写すだけでなく、すべてを保持するのだ。

印象 (impression) はキャンバスに写ると同時に起こる。それから、これを直ぐに暗い所に持っていく。1時間ほどで塗料は乾き、大変に貴重な絵画が完成する。その忠実さにはどんな画家もおよばず、時間が経っても全く変質しないのだ。

画家はいろいろな物質から絵具を作るが、われわれは光の実体からもっとも純粋な物を取り出した。しかもこれは時間が経っても全く変化しないのだ。描写の正確さ、タッチの強弱、ニュアンスの諧調、遠近法、これら全てを自然 (la nature) に任せるのだ。自然は確実に誤ることのない調子で、われわれのキャンバスの上に画像を描く。それは目を欺き人をして疑わせる。現実なる物は目、耳、触覚、全ての感覚に同時に作用する幻覚に他ならないのではなからうか。

精霊（中崎注：総督）は続いて物理的な詳細を論じ始めました。始めに

光線を写して保持するあの粘い物質の本質，2番目にその合成と使用の困難さ，3番目に光線と乾燥物との作用：これら3つの問題を私は現代の物理学者に提供し，その学識に委ねます。

この間ずっと私はあの画面から目が離せませんでした。嵐が荒れ狂う海を海岸から眺める，心ある見物客もこれほどの生なましい印象は受けないでしょう。画像の全ては本物そのままです。総督は私の陶酔を遮りました。私は君をこの「嵐」に留め過ぎた。精霊たちはこれでもって，世界の騒乱の姿と人類の波乱に富んだ諸相を寓話的に表現したかったのだ。さあ，これからが君の好気心を満足させ，さらなる賞賛を呼びおこすに違いない物だよ。

19章「画廊，または人類の運命」

(La Galerie, ou la fortune du genre humain)

総督がこの言葉を口にした途端に，両開きのドアが開いて大きな画廊に導かれました。そこで私の驚きは驚嘆にまで高められたのでした。

両側には200もの窓があって明かりが差し込むものですから，目はその鮮麗さに耐えられないほどでした。窓と窓の間には，さっき言ったばかりの絵が描いてありました。窓からは精霊たちの領土の1部が見えます。絵には森，田園，海，人びと，軍隊，全領土が見えますが，それら全てがあまりにも忠実に描かれているので，私はまた幻覚に落ち込まないように時どき気を取りなおす必要があったくらいです。私が窓から見ているのが絵画ではないのか，またカンバスの中に見えているのが現実ではないのか，一体どちらなのだ。私にはその度に分かりませんでした。

総督は言いました。さあ目を挙げて見るのだ。大地を揺り動かし，人類の運命を決定した驚嘆すべき出来事を見よ。ああ，かの強大な権力の末や征服のあとに残った物は何か。これらの真の面影はこのカンバスの上に絵画として残された痕跡に過ぎないのではないか。

6. Tiphaigne は「写真」を予言したのか？

総督の説明にあるように，四大の精霊が案出したこの描写の方法（便宜上ここでは「写真」と呼ぶことにする）は人間の過去の出来事を記録し，その興亡変転の諸相を再生して人に見せるための手段である。その操作は

かなり具体的に「嵐の海」の中で説明されている。絵具（感光剤）は光の実体から抽出した物で、これを粘い塗料の形にしてカンバスに塗る。カンバスを写そうとする対象物に向けると、絵は瞬きする間にできてしまう。これを暗所に持って行き1時間ほどおくと塗料は硬化して「写真」が完成する。

Tiphaigne は言っていないが作品は明らかに「天然色」である。たとえば第19章「画廊」の中で窓から見える外の景色と、窓の間に架けてある「写真」との区別が付かないと言っているところからもこれが分かるだろう。次ぎの問題はこの「写真」が「静止写真」なのか「活動写真」なのかである。

第18章「嵐の海」の冒頭にこれが「活動写真」であることを示唆する記述がある。「ほんのさっきまで晴れていたのに、一体どんな奇跡で急に曇ったりするのか。」またすでに述べたように第19章「画廊」では外の風景と「写真」との区別がつかないと言う。「写真」が静止していたら、動いているはずの外の景色との区別は容易につくはずである。

しかし「活動写真」だとすると奇妙な事が出てくる。この塗料を塗ったカンバスを仮に1分間「嵐の海」に向けておくとしよう。するとこの間に1分間の「嵐の海」の動きが記録される。これを再生すると「嵐の海」の動きは1分間だけ見ることができる。ではこの1分間のあとはどうなるか。また元にもどらねばならない。すなわち1分間再生の繰り返しである。Tiphaigne 細かい点には無頓着なようである。

次ぎの問題は塗料を塗ったカンバスを対象物に向けただけで「写る」だろうかである。現在のフィルムでこんな事したらフィルムが無駄になってしまう。フィルムの上には「映像」を投射する必要がある。この目的に現在ふつうに使われている装置はレンズの付いた「カメラ」であるのは言うまでもない。レンズの付いた「カメラ」は Tiphaigne の時代にはもちろんあった。18世紀には写生用として大流行をしたので、医者で物知りであった Tiphaigne が知らないはずはない。ただ主として風景写生用だったから、現在のと違ってかなり大きかった。「暗箱写生器」(camera obscura) と呼ばれているのがこれである⁽²³⁾。「Giphantie」(1760)のころには日本にも入ってきている。杉田玄白「蘭学事始」(文化12年、1815)で

は田沼時代のこととして次ぎのようにある⁽²⁴⁾。この時代は世の中が「甚だ華美繁花の最中なりしにより」オランダ船からいろんな物が日本に入ってきた。この中にテルモメートル（寒暖験器）などに混じってドンクルカームル（暗室写真鏡）もあった。「ドンクルカームル」(donkerkamer)はラテン語「camera obscura」のオランダ訳である⁽²⁵⁾。渡辺華山も肖像画を描くのにこれを利用したようである⁽²⁶⁾。

「Giphantie」の中に「写真」ファンタジーを再発見した Fournier はその著書「Le Vieux-Neuf」の中で Tiphaigne は暗箱写生器を使って研究したのだと言っている。もちろん、そんな証拠はない。もしそうなら彼は第18章「嵐の海」の中でもっと科学的に彼の「写真」を説明できたはずである。彼にとっては向けたら「何んでも写るんだ」でよかったのであろう。

次ぎに感光剤についてであるが「Giphantie」(1760)の時代には感光性物質についてもかなりの知識が蓄えられていた⁽²⁷⁾。染料に光が当たると退色することは古代から知られていたが、反対に白い物が黒くなる現象の方は珍しい。それでも17世紀になると硝酸銀が光によって黒化することが観察されている。硝酸銀は硝酸の中に銀を溶かして作る物で錬金術の時代から知られていた。この硝酸銀水溶液の中に塩酸を加えると白い沈殿が生じる。現在の言葉で言うと塩化銀である。この塩化銀が光によって（彼は空気に触れてと思っていた）黒くなるのは有名な Robert Boyle (1627-1691) がその著書「Experiments and Considerations Touching Colours」(1663)の中に記録している。このラテン語版は1667年になって出版された。Newton「プリンピア」(1687)より20年も早い。

しかし、これらの銀塩を使って「物を写す」ことを発明するのは Johann Heinrich Schulze (1687-1744) まで待たねばならない。Schulze は学生時代 Halle 大学在学中「フロジストン学説」で有名な Georg Ernst Stahl (1660-1734) に化学をおそわった。Schulze が「物を写す」ことを発明したのは偶然である。彼は燐光物質を作るつもりで実験していたのだが、硝酸銀水溶液を浸みこませた石灰粉末が太陽光によって黒くなることに気が付いた。文字を切り抜いた紙を上に乗せて太陽光に当てると、その文字が黒く「写った。」彼がこれらの結果を「レオポルド・カロリン王立アカデミー」誌にラテン文で発表したのが1727年である。これはラテン文とは

言えドイツで出版されたから Tiphaigne は知らなかったかも知れない。だがフランス人 Jean Hellot（1685-1766）の「秘密インキ」（écriture invisible）の方なら知っていたのではあるまいか。Hellot がパリ王立科学アカデミーに「新しいあぶり出しインキについて」（Sur une nouvelle encre sympathique）を発表したのが 1737 年である。このインキは硝酸銀の水溶液で、これで書いた文字は光に当てて始めて黒くなって読めるようになる。

Tiphaigne が「嵐の海」の中で、暗箱写生器の使用やこれら銀塩の事でも例として挙げておけば、彼はあるいは少なくとも「写真の発想者」位には評価されてもよかったのである。

もっともイギリス写真史家 Gernsheim によれば⁽³¹⁾、Tiphaigne も彼に先行するフランス作家 Fénelon の書いた物語（1699）に影響されたのではないかと言う。Fénelon は同じような「空想の国」の絵画について、次ぎのように言う。

「この国には画家はいません。しかし、ここでは友人の肖像、美しい風景などを描こうと思ったら、金か銀の大きな盤に水を満たして、写そうとする対象の前におきます。しばらくすると水は凍ってガラスの鏡になり、この上に消えない像が残ります。」

ドイツ奇想作家 E. T. A. Hoffmann（1776-1822）の短編の中にも鏡に固定された肖像画の話があるそうである。中国に数多くある綺譚集の中を捜せば、おそらく似たような挿話が多く発見されるかも知れない。

いずれにしても、こう言う訳で Tiphaigne を「写真の発明家」と呼ぶことはできない。

写真史家 Potonniée は「写真を予言した」ことまで否定している。しかし「こんな事も可能ではないか」程度が「予言」と言えるのだったら Tiphaigne の予言を全面的に否定する訳にもいかないだろう。

「程度」問題なのである。

だからと言って彼の「予言」が Wedgwood, Niépce, Daguerre, Talbot などの科学的写真研究のヒントになった事はないはずである。それほど「Giphantie」は忘れられていたのである。

写真史家 Potonniée は面白い文章で自分の写真史第 8 章「Tiphaigne

de La Roche」を締めくくっている⁽²⁸⁾。

「『Giphantie』は写真を予見 (prévu) してはいない。写真の発見を助けたところか、写真の方こそがこの平凡な小説を発見し、これをその永遠の忘却 (un éternel oubli) の中から引き出してやったのである。」

Potonniée は気が付いていたかどうか分からないが「Giphantie」第2巻第6章「レンズ」の中にこの同じ「永遠の忘却」が出ている。

この世の名声もやがては「永遠の忘却」の中に消えさる運命にあるという一節である⁽²⁹⁾。

この「写真史シリーズ」の論考を書くにあたって、いつものように富士写真フィルム株式会社 富士宮研究所 安達慶一および武田薬品株式会社 創薬第3研究所 青野哲也の両氏に大変お世話になった。またこの度は「Giphantie」マイクロフィッシュ借用について大阪大学文学部文学科仏文学講座 粕谷雄一氏に大変にご迷惑をおかけした。文献の収集では大阪大学附属図書館 参考掛 南谷照子, 東田葉子, 永田敏恭, 中京大学附属図書館 清水守男, 田中良明の諸氏から多大のご援助を賜った。この機会に、これらの皆さまに厚く感謝の意を表する次第である。

文 献 と 注

- (1) たとえが次ぎのようである。J. M. Eder (E. Epstean trans.) *History of Photography* (以下に Eder 「写真史」と略す) Dover Pub. Inc., New York, 1978, p. 89; Helmut Gernsheim, *Origins of Photography* (以下に Gernsheim 「Origins」と略す) Thames & Hudson Ltd., London, 1982, p. 22; G. Potonniée, *Histoire de la Découverte de la Photographie* (以下に Potonniée 「仏文」と略す) Paris, 1925, p. 52; G. Potonniée (E. Epstean trans.) *The History of the Discovery of Photography*, Arno Press Repr., New York, 1973, p. 42.
- (2) Potonniée 「仏文」 p. 42.
- (3) Potonniée 「仏文」 p. 42; Edouard Fournier, *Le Vieux-Neuf, histoire ancienne des inventions et découvertes modernes*, E. Dentu, Paris, 1859.
- (4) Eder 「写真史」 p. 90; Potonniée 「仏文」 p. 42; Mayer & Pierson, *La Photographie, considérée comme art et comme industrie; histoire de sa découvertes, ses progrès, ses applications-son avenir*, Hachette, Paris, 1862.
- (5) 中崎昌雄「世界最初の『写真家』—Thomas Wedgwood の生涯と業績」中京大学「教養論叢」第28巻第4号(通巻81号) 829 (1988)
- (6) 中崎昌雄「『現存する世界最古の『写真』—Niépce ヘリオグラフとその『左右問題』」中京大学「教養論叢」第28巻第1号(通巻78号) 1 (1987)

- (7) Babylon 版, Durand, Paris, 1760 (以下に「Giphantie 仏文」と略す); マイクロフィッシュ版 (6枚) Microédition, Hachette, Paris, 1972.
- (8) Tiphaigne の著作などについては次ぎを参考にした。 *Grand Dictionnaire Universel du 19 Siècle*, Tome 15, p. 219.
- (9) 島尾永康「ニュートン」(岩波新書) 岩波書店, 1979年6月, p. 142.
- (10) Isaac Newton, *Opticks*, Dover Pub. Inc., New York, 1952, p. 339.
- (11) B. Y. T. Dobbs, *The Foundations of Newton's Alchemy*, Cambridge Univ. Press, 1975.
- (12) 原 光雄「化学を築いた人々」(自然選書) 中央公論社, 昭和48年11月, p. 58.
- (13) 日本古典文学大系「風来山人集」岩波書店, 昭和51年3月, p. 172.
- (14) Tiphaigne de La Roche, *Giphantia* (以下に「Giphantia 英文」と略す) Dublin, G. Faulkner, Essex Street; J. Potts, Dame Street, 1761.
- (15) Gernsheim 「Origins」 p. 22.
- (16) B. Newhall, *Photography: Essays & Images*, The Museum of Modern Art, New York, 1980, p. 13.
- (17) 「Giphantia 英文」第1巻, p. 42.
- (18) 「Giphantie 仏文」第1巻, p. 73.
- (19) 中崎昌雄「『だれが始めて『ハイポ』(チオ硫酸ナトリウム) のよる写真『定着』を発見したのか?」 中京大学「教養論叢」第30巻第3号(通巻88号) 663 (1989)
- (20) B. J. フォード著, 伊藤智夫訳「シングルレンズ」法政大学出版局, 1986年7月。
- (21) 「Giphantie 仏文」第2巻, p. 132.
- (22) 「Giphantia 英文」第2巻, p. 68.
- (23) J. H. Hammond, *The Camera Obscura - A Chronicle*, Adam Hilger, Bristol, 1981.
- (24) 杉田玄白「蘭学事始」(岩波文庫) 岩波書店, 1982年3月, p. 24.
- (25) 山脇悌二郎「長崎のオランダ商館」(中央新書) 昭和55年6月, この172ページでは「ドンクルカームル」を夜間でも解像力のある眼鏡と解釈している。
- (26) 中崎昌雄「『馬琴日記』と馬琴の義歯」中京大学「教養論叢」第29巻第3号(通巻84号) 834 (1988)
- (27) 中崎昌雄「Lichtschreibekunst (Photography) の発明—Johann Heinrich Schulze とその光化学的研究」中京大学「教養論叢」第29巻第1号(通巻82号) 1 (1988)
- (28) Potonniée 「仏文」 p. 56.
- (29) 「Giphantie 仏文」第2巻, p. 161.
- (30) このような「地下世界」観は Kepler や Kircher などが抱いていたものである。 Athanasius Kircher, *Mundus subterraneus* (1665); ゴドウィン (川島訳),

渋沢, 中野, 荒俣「キルヒャーの世界図鑑」工作社, 1989年9月, p. 213.

- ⑧) Gernsheim 「Origins」 p. 23 ; François de Salignac de la Mothe (Fénelon), *Les Aventures de Télémaque, fil d'Ulysse*, 1699.